

1 研究主題

主体的に創造活動の喜びを味わえる実践と評価
～造形的な見方・考え方を働かせて～

2 はじめに

本研究会では、昨年度から新学習指導要領をもとに、造形的な見方・考え方を働かせる実践と評価方法の向上を目指して研究を進めている。本年度は、社会に開かれた教育課程の実現のために、指導や評価の実際について多くの教員で検討し、授業改善を目指していくことで、主体的に創造活動の喜びを味わえる児童生徒の育成に繋がると考え、指導計画の立案や実践に臨んだ。

3 研究経過

(1) 図画工作科・美術科指導

- | | |
|----------------|------------|
| ア 教員の苦手意識調査 | (4/26) |
| イ 苦手項目に対する改善策 | (5/10) |
| ウ 評価規準・指導計画の作成 | (6/14、7/5) |
| エ 評価実践報告 | (10/11) |
| オ 愛日造形教育研究発表会 | (10/28) |
| カ 今年度の反省 | (2/8) |

(2) 図工・美術競技会、教育展

- | | |
|--------------|---------|
| ア 教材研究 実技 | (9/13) |
| イ 競技会・教育展の反省 | (10/11) |

4 研究の概要

- (1)ーア 指導に対する教員の苦手意識を把握する目的で、記述式アンケートを実施し、苦手項目を抽出した。今年度は評価規準と指導計画について検討することとした。
- (1)ーイ 苦手項目に対する改善策として、発達段階に合わせた題材や目標の設定をするために、日文の資料等を参考にしながら各学年の児童生徒の実態について情報共有した。
- (1)ーウ 各小学校、各学年で実施するカリキュラムをまとめ、各学年で題材の内容について検討した。また、昨年度の反省点を踏まえた実践になるように共通理解を図った。
- (1)ーエ ウで決めた評価規準と指導計画をもとに、それぞれの評価の実践発表を行った。事前事後で観点別評価の項目を話し合い、より客観的な評価を

行うためにはどうすればよいか検討を重ねた。同じ題材で実際の作品例を見ながら評価について考えることで、より具体的に検討を進めることができた。

- (1)ーオ 愛日造形教育研究発表会に参加した。子供たちのために図工・美術で何ができるかを中心とした発表があった。講師の牧井正人先生から対話型鑑賞の実演とその重要性について学び、児童生徒の造形的な視点を育むために鑑賞活動がいかに重要かを再認識することができた。研究発表では、児童生徒が自らの思いをもち、意思決定をして表現活動に臨めるように様々な工夫を取り入れた実践が多かった。どの学校でも、新学習指導要領に合わせ、技能の優劣ではなく思考・判断・表現をどのようにして磨き上げるかということに重点を置いていることが伺えた。一方で、評価についての議論もあり、思考・判断・表現の過程を客観的に評価に反映させていくことにはまだ課題があるという意見も出された。
- (1)ーカ 今年度の研究成果をもとに、評価方法の見直しを行い、よりよい年間計画を各学年で作成し、共通認識のもと児童生徒への指導が行えるようにした。
- (2)ーア コロナの感染予防のため、紙面開催となった。それぞれの学年の題材に合わせて、道具の使い方や材料の選定方法について紙面にて共有した。
- (2)ーイ 図工・美術競技会・教育展の反省では、教育展終了後に、競技会の準備までに困ったこと、当日困ったこと、3年ぶりの開催についての意見などを小牧市文化部へ提出した。

5 今後の課題

昨年度の研究で課題となった各校での評価方法のばらつきや主体的に学習に取り組む態度の評価方法、教科書の参考作品と実際の評価との差異を改善するために、指導と評価が一体となるように指導計画の作成から行った。評価規準の傾向として、知識・技能が同じ評価規準になりやすいこと、思考・判断・表現の評価規準が構図や技能の工夫の有無が中心となることが分かった。これらの偏りは技能向上の指導につながりやすいため、評価規準の在り方を見直し、さらに研究を進めていく必要がある。新学習指導要領の目標にある「造形的な視点を理解すること」や「主題を生み出すこと」をどのように取り入れていくかを考え、共通認識を持てるような研究会にしていきたい。また、愛日造形教育研究集会で得た知見を生かし、児童生徒の豊かな発想や思いを引き出す手立てを様々な視点で考え、支えていけるようにしたい。そのためには、小学校と中学校それぞれの発達段階に合わせた指導計画やその連携が必要不可欠なので、今後の研究会で取り上げていきたい。